

北奥羽の自由民権論者

角鹿忠四郎について

稲葉克夫

一

角鹿忠四郎の名が正史に現われたのは、明治十三年三月二十八日の自由民権派、蓮華寺集会の代表委員としてと、十三年から十七年にかけての輿論事件^{（註）}においてであるが、その活動内容は審うかでない。

彼は旧姓を柴崎といい、野辺地町馬口の旧家で旧藩時代、浜取り飾まり役で丹壁、回船業を営んでいた。マルキ^{（註）}こと、三代目、柴崎権三郎の次子・鹿四郎——^{（註）}家を創設一の二男である。

安政四年八月廿四日生まれ、後に同町の醸造業、回船内屋で、南部藩長者番付にも載った。困力^{（註）}マルキ^{（註）}こと、再婚吉兵衛の長せき急（安政六年三月三日生まれ）と結婚し、吉兵衛の養子となった。

彼の思想的素養はどう進つたらよいだろうか。残念ながら現在はそれを知るべき直接的資料がない。それで縁戚の吉米旭、青藤の老師^{（註）}から聞いた、彼等らの祖父忠四郎の従兄、稲本育一の面影から、モンタージュ写真式

に忠四郎を復現する方法、忠四郎の姪、稲本フジとニコライの肉序、忠四郎の息子^{（註）}の名前からの類祖、輿論事件からの漢譯^{（註）}など、種々雑多な方法、調査をこらしたみに。

二

稲本育一は、四代柴崎権三郎・やすの次男で、安政三年十一月二十八日の生まれ、妻は稲本利左衛門・はやの長せ、ちよう（安政五年六月三日生まれ）である。明治三十四年に長男鳳氏（十和田親光電鉄三代社長、銘通^{（註）}正東醸造元）より分家し、明治四十三年十二月五日死亡している。妻方よりは、大正八年に没し、相続人がない理由で絶家となっている。稲本の姓は新渡戸伝の三本木稟剛^{（註）}に功があつたので賜つたといわれる。へ吉米地愛子談（新渡戸伝日記に出てくる稲本屋利左江門が恐らくそれであろう）。

稲本育一と角鹿忠四郎の關係は、忠四郎の孫、柴崎健一宅の系図によると、育一は柴崎家では金太郎と呼ばれており、五代目柴崎権三郎（小太郎）の弟となっている。

新戚戚では、忠四郎と畜一は兄弟のようにいわれているが、系図帳の中では叔父、甥の關係、すなわち、忠四郎は四代目権三郎（宇太吉）の弟となっており、甥より耳下になつてゐる。この奥、野辺地役場の戸籍では従兄弟となつてゐる。それにしても、五代叔三郎の養子が忠四郎の二男、國太郎であつたから、よしんば叔父、甥にせよ、従兄弟にせよ、兄弟同様だつたと言ふことができよう。

もちろん、ぞろは言つても、それ／＼個性の強い性格であつたろうし、当時危険視されたであろう主義主張にどの程度、共鳴しあつていたか問題と言える。また逆に先覚者として生命を賭して主義に殉じたから、肉身の兄弟以上に親密であつたとも思われる。何れにしても想像の域を出ないが、私はそういうハンデを自覺して、この推論を進めていきたい。

馬口の柴崎家は、明治開化期に、渡辺朝の商人らしく一攫千金のアンビションを拵つてその身代を銀山経営で失つたといわれている。畜一も鉦物標本を一杯拵つており、洞内にレンガを焼く工場を建てたこともあり、新知であつたろう。そういう点も手強い生き方を身上とする姑と相容れなわけである。このことは二人の老妣も交々語っており、たとえは青藤さよ氏は手紙の中で、忠四郎もからむ葛藤について次のように書いてゐる。

「忠四郎様は大変な勤家で、政治が好きで身代を無

くしたようだと話しています。丁度、私の母へ畜一長女フジが十歳の時、会いたいと箱本へ申しこんだところ、箱本の祖母（姑）はキカナイ人だつたようで、その頼も叶わずに貧苦の内に、心細く淋しく死んだことだらうと話しています。その時、母は魂に押さえつけられたと姉に知らせてあつたようです。その頃、力にする弟、私の祖父は、家業再興をはかつて忠四郎様と水盃を交して台湾に行つたと言つています。この壮途も空しく破れた憐れな兄弟の晩年を思い浮かべると、一入憐れに涙ぐむと姉は言つております。」

善家を飛び出した畜一は、その後、北海道の渡島郡森町で弁護士、代言人をしていんだという。どういふ内容の事件か不明だが、白老の別当様へ神主の裁判沙汰を願決してやつたという話も語り伝えられてゐる。白老は噴火灣を獨り切つた対岸だつたから、交流は大いであつたことだろう。

存お、姑、はやせは六ヶ所村の古村、平沼部落の「ハシパ」といふ家の出だといわれる。「ハシパ」は旧家で、同部落に多い橋本一族の純本家であり、栗南の豪家とさまざま縁戚をもつてゐる。入戸の河内屋橋本家もその出であり、野辺地の飯田家、藤坂の小山田家などもそうである。

平沼部落は小川原湖、田面木沼とつながる高瀬川河岸に聳立した小村で、千五も前から開けたといわれ、和船

時代は活気を帯びた村だった。しかし、昭和の現代でも冷害、高潮などと自然条件が酷薄で、パイロット事業など国や県の援助を必要としている地域であり、したがって百数十年前、その部落出身である峠が、忠四郎、育一のような生き方に必死に抵抗したというのは充分に肯づけることである。

二人の老母がその母（田中茂）から聞いた柴崎家は野辺地きつての豪商で、海にずりりと並んだ白壁の由緒屋号は、野辺地湾の沖からも際立つてゐていたという。は時、野辺地は殷賑を極めた港町だったのだ、亜細との関係も極めて深く、柴崎の親戚でもドイツ留学をして夫と共に著名な眼科医だった藤野病院やマルヒラと呼ばれ、日支貿易で巨万の富を得た一族も末玄町にあり、華族から嫁を貰ったりしていた。

育一は東興義型のオ一回卒業生といわれている。稲本家へ養子に入る縁は、何の縁の商いに三本木へ来たのが取り持ったといわれるが、福沢門下の啓蒙主義者たちに芋んだ新知識の育一と商家の紐帯、発展を一緒に考えている峠とは肌合いが合わなかったらしい。そのため長セフジが三才の年——明治十九年頃——養家を飛び出したのである。それから十五年間、台湾や北海道など新天地の流浪の旅を続け、没落した商家の再建——その他いろいろの理由があつたろうが——をはかつて、結局失敗に終わったのである。この間の軌跡が明治三十四年の分家と

からんでゐるのだろう。

峠との対立はその後も続いたらしく、長セフジの教育についても、本人が東京のニコライの所へ行って洋裁を習いたい旨申し出たところ、育一は本人に任せだが、祖母は絶対反対でとう／＼駄目にまつたという。（芭米地愛子談）

ところで、このニコライ云々の話は極めて重要な鍵を持つてゐるのである。全く謎に包まれている芭米忠四郎の思想内容を知る唯一の手がかりともいえるほどのものである。

三

ニコライ（一八三六——一九一三）は、文久元年（一八六一）に函館のロシア領事館付司祭として来日し、ギリシヤ正教の布教活動を行ない、沢辺琢磨を日本最初の司祭としたが、この沢辺が明治元年、早くも入戸にまけており、明治七、八年頃に市内一帯で布教を行ない、その実をあげている。そしてその勢いは郡部にも広がっており、明治七年三月十七日、三戸の才十七中学区取締松尾紋左衛門、北村礼次郎から提出された「コヤン警戒ニ係ル建言」（青森県史七）一四一によると「今般衆教之行はれ候も、是全く内教不番が故也。具社中を見ルニ多クは、破産道ヲ失に候者、或は固辭友を失に候者也。」と一つの実態を明らかにしている。ここでもキリスト教は

生活にあえぐ階層の救いとしてあらわれ、仏教・神道は
馬世、人心に無力なことを示している。

「建言」はさらに具体的に布教の模様をのべ、先月、
箱館教会副議長大田詰謙吾、此元江参候節、七戸ニ而杉
原某、外ニ山与と申者同人江南社申入候得とも其人物採用不致
由しと各地の動きが報じられている。

この文中に出てくる、七戸の杉原某や山与とはどうい
う人物であるか不明だが、少くとも既に草深い南部原野
に南化のルートが設けられていることが判然とするわけ
であり、当然、野辺地や三本木、藤坂らの宿にも何らか
の影響があつたと見てよいだろう。一方、この書面にも
出ているように、異教の進出に対して『皇國』一事件は
として強圧が加えられているのである。

五戸の藤田貢については、孫の貢一氏の記憶によると、
幕末に京、大阪で南部藩の隠密的役柄についており、新
選組などもよく知っており、虎藩置業後は五戸にこもつ
てウルシ業などしていたが、殆ど無眠のまゝ晩年を過ご
し、明治四十三五年頃、八十三才の高令で亡くなられたら
しい。教会設立の件は貢一氏には全くの初耳だそうであ
るが、計算すると、教会問題の時は四十才の壮年、分別
盛りであり、決して、一時の氣まぐれではなかつたと思
う。時代転換の足場をギリシア正教に求めたとみてよい
のではなからうか。

八戸地区のギリシヤ正教受容者の名簿の一部が『北奥
羽の現勢』一冊41一に出ているが、士族や医師など知識
人層が圧倒的に多く、しかも晩年まで教義を守つた人が
多かつた。

明治十四、五年頃の青森県キリスト教の動向について
『基督教新聞』(明治20、8、3)は教報として紹介し、
特に弘前教会の地位を高く評価している。その特色は「
此地の信者ハ大抵戸主にして金満家多きを以て独立自給
の教会と云ふの見込ある」ことであり、この点、奥南地
方の場合と多少趣きを異にしているといえよう。

また青森教会については「青森ハ東奥ノ一湊にして北
海道へ渡る要地なり、且つ県庁官所のある所なり、我が
美似美教会よりは去る明治十二年を以て伝道に着手せし
も種々の困難に因で暫く中絶せしが明治十六年再び伝道
に着手し同十九年より廿年に至ては漸く進歩の景状を呈
し衆多の信者を加え、官所に県庁に中学校に道を求むる
者大に起り多望なる良園と云ふに至れり、此地より伝道
すべき良地は小湊、野辺地等なり」とその橋頭堡的位置
を確認し、また「陸奥七戸、北海道の首都は伝道上の要
地なるが故に將來伝道者を送らざるべからず」とあり、
野辺地、七戸、五戸、八戸が新文化伝播、浸透の拠点と
目されていたことがわかる。

もろろん、キリスト教の活動は政治情勢や政治思想と
異質のものではあるが、明治社会の開明度と切り離せな

い関係にあることも事実である。入戸の自由民権派の総
師、源蔵はニコライの直弟子であり、奥南の自由民権運
動の枢軸であり、再鹿忠四郎が活躍した驛駒事件（庫馬
組合事件）は源蔵の登場によつて新局面をむかへ、入戸
派（土曜会）のリーダーシップが確立したのであり、この
際、特に注意すべきは、この源と自由党左派のリーダー、
大井憲太郎とが、ギリシア正教徒という関係からか、非
常に近い関係にあつて、後耳、南春茂（後の入戸町長）
などを大井の所へつかわしているという事実である。

ところで、稻本フジの口から彼らは、南春茂や奈須川
光宝（後の代議士、土曜会の指導者）らの名前をよく聞
かされていたというが、このことは再鹿忠四郎、稻本育
一の政治路線を伝えるものではなからうか。しかも育一
長セフジがニコライの所へ行つて学ぶという話題で家
内に一つの紛擾が生じたということも、ニコライを校と
した網目の存在を物語つていよう。

青森県官療派の巨頭、寺井純司は士族であり、かつ代
言人であり、明治十五年から三十二年までの七期の県議
生活をし、議長も勤め、最後は政友会代議士を二期勤め
た改進黨の総師であるが、彼も津軽藩校、橘古館に皇漢
前学を学び、さらに藩費でニコライから語學を学び、そ
して福沢諭吉の慶応義塾で英語を修め、明治五年、東奥
義塾一尋教授に任じ、代言人の資格を得た経歴を持つて
いる。この寺井の歩んだ道も再鹿忠四郎を知る一つの手

がかりになるのではなからうか。

四

再鹿忠四郎が自由民権運動に参加した契機は全く不明
である。稻本育一が東奥義塾の初期の出身であつたとす
れば、当然に菊池九郎、本多庸一らと南文也（共同社）
グループと何らかのつながりがあつただろう。

また、私の推定のように、大井憲太郎の「明法社」で
法學を學んでいたとしたら、自由民権運動に参加する契
機はより強いわけである。

明治十二年十月廿三日の「朝野新聞」によると「大井
憲太郎氏の開設されし明法學舎は去る十八日議に由校し、
三日間に生徒をも退校せしめられたるよし」とあり、几
耳から始まつた大井らの法學教育が中止されたことが報
じられているが、その閉鎖に到るまでの事情に何かニュ
ースバリューがあつたのだろうか。反面、その存在も有
名であつたのだろう。

大井は元老院退官後、曙新聞の記者になり、福沢諭吉、
中江兆氏に任じられて私立法律学校「誦法學舎」を明治十
年に興した。講師はフランス等の大井と眞作麟祥、松岡
正之、英等は平岡卓哉、独逸等は北島道庵、小松育法、
明清津は岡松寛谷であつた。しかし明治十年、大井と北
島が衝突し、大井は新たに「明法學舎」を創立し、法律
原書でもつて法學を教えたが、かたわら裁判の代書

を弁護事務をしていた。この時代は代言人自身、自由民権の伸張を主張し、民選議院の開設を要求する政談演説をさかんに行ない、藩閥政府の打倒を主張していた。

大井に關して重大なことは、彼が幕末、長崎に留學している時に、ギリシヤ正教に入信している事實である。平野義太郎の『大井憲太郎』(吉川弘文館、昭和40)はこの點について余り解れていないので、私としても入信の事實以上のことはわからないのであるが、ギリシヤ正教が県南にいち早く伝道されたことや前述のように源景と大井の連絡のことなどを考えてみれば、大井とギリシヤ正教との關係は青森県の自由民権運動に何らかの影響をもつものと思われるのである。

また、平野氏は大井が源太郎から憲太郎に改名したことを「折柄、著作麟祥は *Conversion* を記して日本ではじめて『憲法』の文字を創意したことと照應させるとき、憲太郎の憲こそ、この憲法の制定を翹望する念願を名のうちに念じこんだとみられる。」(略)と解しているが、私も、忠四郎が二男——明治十七年丑生れ——に『憲太郎』と名づけ、長男に『孝太郎』(大井憲太郎の幼名)と名づけに心理を同様に見たい。

大井の思想の中にある國權意識や使命感は何處忠四郎の中にも感情移入されへアジア・日本・列強の關係を柔道改正問題の中で鋭くみつめていた野辺地町の野坂ス五郎も同じ仲間であつたろう。二男にもかかわらず國太郎

と愛児に名づけるほどに昂ぶっていたのである。

角鹿忠四郎が代言人であつたかどうかは目下のところ、そのいずれとも決定づける資料を欠くが、艱難事件で、七組番員中、最若年者ながら、野辺地組代表番員の資格でもつて縱横に活躍した事實こそが、彼が農民を守る代言人であつたことを雄弁に物語っているといえよう。事件は裁判沙汰になつたわけであるが、恐らく法廷才華、法廷技術の面においては源景と共同作戦を樹て、猛烈な官権側の彈圧に屈せず、結局、人民派を勝利に導いて行つたという実績は、確かに大井門下としての名を恥ずかしめないものと言つてよい。

明治四年、青森蓮心寺に東興義塾英學部が附かれた。稻本齊一がここで學んだとすれば、一教下の忠四郎もやはりここで學んだことだろう。馬内から青森へは陸路といい、海路といい極めて交通の便が充實しているし、商業圏でも統合されているのである。

義塾で一応のガイダンスを受けた忠四郎は上京して大井門下になつたと思われるが、忠四郎と大井を結びつけたものは、より直接的には義塾の教師でニコライに學んでいた前記の寺井純司ではなかつたろうか。後年、寺井の改進黨は上北郡に大勢力を枝植するが、その人的なつながりは既に明治初年からあつたものとみてよく、再鹿(柴崎)忠四郎の身の振り方についても、柴崎家の相談に与かつて同じニコライ、ギリシヤ正教の仲間の大井

を紹介したものと考える。

当時、源最もニコライの門におつたのであり、逆に考えると、源最を難航事件に引き出したのは角鹿忠四郎に
つたのではないかと考えられる。

なお東奥義塾で、角鹿らに大きな影響を与えたと思わ
れる人物に榊荏芽がいた。

榊は東奥義塾創立に深く関係し、寮監も勤めたが、後
に東京に出て法律を修め、司法官となり、弁護士生活をも
おくつて、明治二十一年頃より政界に入り県会議長、
代議士となつて、一主六十余年を郷党のために捧げ、憲
政自治の発達に功勞して、敢て一身の榮譽を顧みなかつ
たと讃えられている。この榊荏芽の生き方が、稲本育
一、角鹿忠四郎に大きな影響を与えたことは争われぬ事
実であろう。

五

明治期の明治青年が、新しい生き方を求めて、法律
や政治、経済を学ぶにめ出束していく姿は、津輕、南部、
斗南といわずに多く見られたのであり、それはまた士族、
豪農、豪商の子弟の別も向わなかつた。

八戸では神童といわれた野田正太郎少年が福沢塾で盛
名を馳せ、彼の室は大芦、檜、島谷部春汀ら舊勳たるア
ンビションに燃える南部青年の溜り場となり、五戸から
は中市稻太郎と従兄弟の島谷部健之助が中村敬宇の同人

社で雇望され、榊引弓人また福沢塾に身を寄せ、ナショ
ナルのリーダー一冊を片手に北米の新天地目指して勇躍
出発していた。島谷部健之助が父の死去のため孝半ばに
して帰途につくと、入れかわり、南部町榊内の士族、村
木晋三は三戸郡下郷外十一校の小等訓導の職を授けら
れて、明治十六年五月同人社の門をくぐつたのである。彼
については、北村島城の『三戸志』には次のように書
いている。「其銳意永く郷里の小天地に躊躇するを許さ
ず（略）宿望たる海外遊學の志を遂げんと欲し、其實を
得んが爲め去て北海道小樽に赴き、木子弟の教育に従事
す。留まること三耳、家嚴固く遠征を許さざるを以て、
遂に外遊の志を絶つ。明治二十三年、帝國議會新に開け、
野村治三郎氏貴族院議員と爲るに及びて、囑を受けて其
顧問役となる。是より以後或は東都に在り或は郷里に帰
り、漸く交りを政界の名士に結び、屢々論客の会合に與
かる。孝大兼ね備わり立論卓抜、文を繞する流麗、先輩
後輩皆相服し、他日地方の先鞭と爲り風雲を叱咤すべき
を期したのであるが、病のため、明治三十二年東京の
寓舎で没した。三十六歳の若さであつた。

村木晋三の影響を最も強く受けた人物に、同じ租内村
出身の吳業家、沼畑忠治がある。彼の回顧録によると、
年少、軍人を希望していた彼の前に現われて、そのコー
スを転換せしめたのは、実に同人社帰りの村木晋三であ
つたことが書かれている。それから、注目にあてえする

ことは徳富蘇峰の平民主義の影響が、この僻隅の地にも及んでゐることである。彼は次の如くいう。「小學校時代ニハ師ノ教化ニ依リテ只奮非凡ノ人物ヲテシムコトヲ目的トシ、是ヲ達セン爲メニハ非凡ノ人物ニ接觸スルニ若カザルヲ信ジタリ、初メ先輩村木香三氏ノ教化ニ浴シタルコト多シトモ、少少の時を語り、更に「村木香三氏亦同人社ニ強固ノ功成リ錦ヲ故郷ニ飾ルト共ニ聲名噴々タリ、乃チ村木氏ニ英語ヲ學ブ。時に明治二十年ノ初頭ナリ、村木氏ハ地方新知識ノ魁ナリ、地方ノ教育家、政治家、名士皆刺ラ氏ニ通ゼザルギノナシ、爲メニ此等人士ノ談議論說ヲ聴クノ好機ヲ得タリ、加、ルニ徳富蘇峰氏ヲ對面民友友ヲ発行シ一種ノ文体ヲ以テ巧ニ平民主義ヲ呼ビゼリニ會シ、彼此相俟ツテ思想ノ變化ヲ来シ、目的ハ甲人ヲミリテ政治、實業ニ移リ渡米ノ企画ヲ爲スニ至リシト明治青年の夢みたコースを語つてゐた。そして、このコースを一応実現したのが、柳引弓人や平野勇造、それに野田正太郎であり、夢に破れたのが中市一郎、稲本喬一、それに角鹿忠四郎らであつたといえよう。

ここで、角鹿忠四郎と最も近い関係にあつたところと思われる平野勇造に多少触れておこう。徳富蘇峰の「大畑町誌」へ、昭和、才四版一によると、「明治十四年の頃、郡警察の名にて書を元老院に送り、志を披露して推輓を請ふた者があつた。右書状は差出地の野辺地警察署へ返送されて、差出人を取訊ねられたが、警察とは立五ニの

手代、當時十八才の堀勇造氏であつた。一手代の身分にて元老院に上書したと云ふことは、物堅い商家の底に叶はぬことで、主人から痛く戒められた。然るに氏の志は田舎の小商人では無く、他日大いに興する処があつたので、主家を退き庵を築して東京に出た。

東京に出て見ると、苟くも志を他日に伸べやうとする輩は、比々として皆洋行して居る。依つて氏も洋行を企て、四方に奔走して漸く旅費を調査し、明治十八年米國に渡航した。最初は政治家を志したが、渡米後、政治は才ニにして、先づ實業家であるべきであると考へ直した。旅費の血流ひなどを働きながら苦學し、彼の武藤山治や和田豊治などは、何れも米國苦學時代の朋輩であつた。在米四ヶ年、専ら建築等を研究して歸朝した。「略」し「一鳴」この後、彼はその技術を見込まれて平野家の養子と取り、三井物産に入社して活躍したのである。

この平野勇造の歩んだコースを角鹿忠四郎も夢みてゐたものではなからうか、そして忠四郎の場合、案累のしがらみの中に是をとられ、遂に激浪の中に没したとみてよいだらう。

平野勇造の勤めてゐた立五ニ、野村新八郎家こそ、博覧會王、柳引弓人の母の家であり、弓人自身も明治十八年頃渡米して、武藤山治や和田豊治らと苦闘してゐるのである。つまり、柳引弓人と平野勇造は全く同じ頃アマリカに渡り、共通の仲間をもつてゐたといふことは、二

人が手を組んでいたとも言えるのである。ここでいえることは、渡米出来た二人には、すべてを捨て、集中し、踏み切れる強さや自由があつたのだが、角鹿忠四郎の場合、既に生家は没落しており、角鹿家の養子という立場にあり、二児を産した美しい妻が存任している。ある意味で囚われに存任なのである。忠四郎は恐らく理想主義的な剛直タイプと思われるので——これは二男国太郎の人格、経歴から類推出来る——それだけに理念、アンビションと現実の間の隔りにさいふまれ、人間的にも分裂し、徹底し多い。矛盾した生活ぶりが続き、従つて恐らくは毒々その養家から愛想づかしをされたのだと思う。

六

角鹿忠四郎は、新時代を生きぬこうとする商家の出であるから、近代商法、会社法など資本主義社会必須の法律の學習に身を入れただであらうし、養家として大いに期待したのだらう。しかし忠四郎の野心、意欲は野辺地の長老達の思惑を越えるものであつた。

私は角鹿忠四郎が大井憲太郎に深く心酔していた証拠として、彼の長子の彦六の命名を強調したい。大井の幼名彦六を拝借したとみるのである。この辺が角鹿忠四郎のバツションネートな性格をある程度示していると思う。このことはフィクションといえるが、私は蓋然性を描けしうると思う。

彦六は、明治十三年三月廿七日、三戸郡五戸町五拾番戸を本籍として生まれ、明治廿六年四月一日、忠四郎死去後の角鹿家の家督相続を行なっている。忠四郎は明治二十五年二月二日に死んでおり、相続までの一年間の空白は恐らく一族間の意志の統一にかつたのであらう。忠四郎の妻きよは既に二十二年五月に離縁に行つてゐる。かかる点忠四郎死去後の相続問題は複雑な極みである。彦六の死亡は明治三十二年十二月十四日午前十一時四十五分、北海道敢振郡有戸村、酒造千場参事地においてである。

所で私は前々から、長男でありながら彦六という命名を一寸解せなく思つていたが、恐らくは襲名かまたは祖父かにいわれあるのを承けた名と思つていた。しかし縁戚からはそのような話も聞かず、また二男に国太郎と名づけた忠四郎であれば、自分の尊榮おくあたわざる大井憲太郎の幼名の彦六を頂いたと考えてよいではなからうか。

次に国太郎と名づけたことは、柴崎家で兄弟に小太郎、金太郎と命名している事実から、お母がち不思議でないともいえるが、しかし私は国太郎は憲太郎と共通する理念を感ずるし、特に明治十七年という時局での日本の自由民権運動のおかれてゐる状況、自由民権論者の心情を考えれば、特に大阪事件を目前に控えた大井一派のナショナリズムの一つの表明と考えることが出来よう。

國太郎の名が高人の子としてふさわしいものであつたことは、異父弟の藤田五一式も語っており、至徳兄弟時代は千次郎という通称であつたを話していた。

角鹿忠四郎と大井憲太郎の間を取り持つ人物に岩手民権派の指導者、鈴不舎定や鶴飼師郎がある。三戸地方の自由民権運動は鶴飼らの遊説によつて初まつたのであるが、旧盛岡藩領として、当然にその影響は、五戸、七戸、野辺地に及ぶのであり、また、忠四郎の死没地が盛岡と云えられていることも、盛岡の自由民権派と交流が深く寺まで盛岡であつたとすれば最後は盛岡に居を構えていたということに尽ろう。鈴不舎定は自由党左派の領袖であり、加波山事件の陰の人物といわれ、大井は鈴木と組んで「東北有志の団体を糾合し、革命軍の先鞭をつけん」として失敗したといふことがある。

明治十七年以降の自由党の激発事件の失敗、特に大井の大阪事件の失敗は、忠四郎にも大きな気落ちをもたらしに思ふ。よしんば驍騎事件の訴訟が有利に解決したとしても、最早それは本源的な民権に及ばない。自由民権運動の夢に破れ、家庭も危殆に瀕し、人生全般について絶望的になつていた明治二十年五月に孝三子、賢三が生まれた。忠四郎はわが子に二度と自分の轍を踏まねたくなひという苦い想ひの上に如世の術を囑くあれと祈念したのである。

このように私は、角鹿忠四郎が、明治十四年の阪駒事

件当初の活動後、全く消息不明になる原因を、大井らの自由党左派に組していたためと考へる。そのため義家や穩健な郷党に容れられなひで郷に去つていたのであり、たま／＼三本木の福本家へ来ても、これが原因で福本家は面会を謝絶したものと思う。つまり危険人物視され、青森県の人脈から隔離されてしまつたのではなからうか。

七

所で、角鹿忠四郎の養家、美濃屋、角鹿吉兵衛家とはどういふ家なのであろうか。可野辺地郷土史資料(上)によると、美濃屋は越前、敦賀の出身らしく、その地の寺に関連した記事が出てゐる。恐らくは北前船の仲間であつたろうが、始めは下北の川内に住み、幕末頃、野辺地に定住したようである。同船同屋、醸造業を兼ねており、可資料には嘉永四年の親告丸遊覧の補証文が出てゐる。嘉永三年の酒屋の記録では、吉六、善兵衛、勘左工門の三軒の酒屋が存在しているが、三十年後の明治十五年の酒屋仲間約定規則には野坂勘左衛門、角鹿吉兵衛、野坂藤太郎、川村福四郎、野利治三郎、西垣善兵衛、島谷清四郎、五十嵐清次郎の八人の名があげられている。美濃屋の規模は、明治十二年にコガニ一ヶであり、玄米九石五斗七升一合、糙玄米三石八斗八升、清酒二百八石となつてゐる。当時としては、県南有数の酒屋である。明治十年頃よりど／＼土地を買い入れ、十三年のイン

フレ期には、長下半の開墾を再鹿良石工門と組んで一
万円の資本で行なっている。有戸のひばり牧場もその一
環であらう。

野辺地の再鹿一族は、この商家美濃屋系と前記、士族
の再鹿良石衛門家系とがある。再鹿良石工門は天保六年
の生まれ、明治三十五年、六十八歳で没している。父種
右衛門、美濃屋とは血縁のつながらぬ関係にあつたが、良
石工門の長男池田郎の妻、やすは再鹿忠四郎の妻さるの
姪、つまり兄、吉兵衛の二女である。また良石工門の後
妻は八戸の神土真宗の寺、本覚寺、広田家の出であり、
この広田家からは五戸の藤田重蔵へ中市稲太郎の妻さよ
の姉の妻も出ており、八戸、五戸、野辺地の人脈の一
環をなしている。

再鹿良石工門は、明治十二年の府県会規則より回議員
として当選、連続二期、その後、府県制が実施されてか
らも果議をつとめ、その間、村長、町長をつとめ、町勢
の発展の基を作つた人物である。党派は改進黨系である
が、一時期、自由党に転じたこともある。

明治十二年九月から十三年一月の間に再鹿忠四郎が産
馬共会委員として、野辺地組から飯田記代と二人選ば
れた時の顔ぶれを見ると、七戸は山田改一、工藤徹郎、
五戸は藤田善五郎、藤田重蔵、八戸は岩泉正意、新宮興
連、田子尾形及四郎、三戸は諏訪内甚蔵であり、馬籍
係は野辺地が野坂英次郎、五戸が江渡又作、八戸が大沢

多門であつた。

この顔ぶれを見ると、全くその地の代表的人物ばかり
である。山田は当時五十歳に近いが、西郷隆盛にも近い
といわれ、七戸さつての政治家であり、当時既に果議の
職にあつて、以後四期も続けた。野村治三郎とも縁戚関
係があり、地方では革新的な思想の持ち主といわれてい
た。工藤は三十二歳、既に各小區の戸長を長く勤め、委
員着任直後、果議生活に入り、改進黨に属して衆議院選
挙にも出馬している。彼は七戸の実力者であつた。五戸
の藤田善五郎は四十六才、名家藤田の分家であり、当時
既に果議であつた。八戸の岩泉正意も三十九才、果会副
議長の職にあり、八戸藩時代からの名望家であつた。田
子の尾形及四郎も四十二才、向もなく果議生活に入り、
四期を勤め、田子の初代町長も勤め、豪族らしい落、然も
企画性あり、典型的な政治家といわれ、議員としても一
頭地を抜いていた。『青森県議会史』一巻の一特に同
僚の飯田記代は新渡戸伝の所に「顔」と見えてい
る人物で、幕末、明治初年は野辺地の総馬政役であつ
て五戸の藤田重蔵と朋輩であり、十三年の年令は不明で
あるが、四十歳前後の町方実力者であつたらう。この他
の各組委員や馬籍係にしても、いづれも当時、既に、ま
たは後年、政治、経済界に目覚ましい活躍をする人物ば
かりである。この奥、野辺地組だけがオニ流の人物を選
ぶ筈はないのである。当時の野辺地の果会議員は、再鹿

長石徳内と立鼓一。野村治三郎、次いで立鼓ニの野村和八郎（野坂年次兵征二男）という錚々たるメンバ―が揃った。そしてこの構成をみると、角鹿、野村の豪商たちが揃うかに野田地を牛耳っていることがわかるのであり、囑望されて所蔵一門に列しながら、かかるエリート路線からそれた角鹿忠四郎には何か決定的な原因がそこに隠れている。

盛族の内で細々ながらも代議士になったそうだが、信承が襲され、また忠四郎と同世代の角鹿吉兵衛へ奪き返す程、つねの養子、七戸の盛田岳正治の弟が政治狂いとなって今にもいわれていること、盛田家を中興した盛田隆盛田岳平治と比較される吉兵衛は公的な事業にまで自分の私財を投入したため、美濃屋の盛産も失われ、しまったという。（盛田産三翁談）などを思いあわせてみると、忠四郎の存在がもたらした影響は極めて大きかったといわねばなるまい。

八

県南自由民権運動の特色は、地区の指導者たちが二十代の若者たちに対して指導力をもっていたということである。八戸の土曜会にしても次のような内情にあった。明治二十三年刊の平屋忠香の『向鶴』の描写によると、土曜会は「八戸所塩町三事務ヲ置き、会員百名以上、

多ク天保生レノ大人ニシテ、県会議員、村長殿、田舎大尽様方、町家の旦那衆ナリ、主義目的ハ地方公共ノ利益ヲ計ルニアリト云ヘバ無論政社ト思ハルレド」要するに余裕ある人間共の直率的なものとみられている。

当時、文明開化の東京においては、天保生まれは、古物の代表と見なされているのだが、八戸の土曜会の指導者は天保生まれの大人なのである。これに対して東奥義塾の自由民権派の中核となつた青年たちは安政以降の生まれで、八戸土曜会の指導者とは二十年余の年令差をもつ。しかも、この二十年の中に明治維新という決定的な亀裂が存在している。角鹿忠四郎はこの亀裂の中に吞みこまれたといえよう。

ちなみに、角鹿忠四郎に類似したイメージをもつ北奥の人物として、秋田県の自由民権論者、山本庄司、柴田浅五郎に少し触れてみよう。山本は山本郡富根村の豪家の生まれで勉強のため上京、東京で新しい政治の空気をたのびり吸って帰郷し、だだちに北羽連合会を組織した。

その翌年の一八八〇年、土佐の立志者の流れをくみ、北羽連合会と異なつて主として下層農民や軽重士族を会員とした柴田浅五郎の秋田立志会が結成された。このクル―はそれだけに一面、世直しの改革性をもつていたと同時に、他面ではドン・キホーテ的荒削りと指導者たちの多量な幹事が目につくようになった。柴田は嘉永四

（または六）年生まれで、母は夢家の出で、嫁入りの時は美しい布で着飾りなどした乗り掛け馬で興入れたといつて評判になったほどで、中農以上に属していたといわれる。（『日本の百年』より）

角鹿忠四郎の許へ嫁いで来たときにもお付き女中を連れて豪勢なものであつたし（きゑは再婚でも女中を連れて歩いた）、その伯母の場合の嫁入り行列は、絵草子にも描かれ、函館かどこかの図書館に納められている筈も伝わっている。東京帰りの新知識、柴崎忠四郎と南部二十四万石の玄关口、野辺地さつての豪商、カクキの一人娘との組交あれば新時代への洋々たる船出と期されたであらう。

しかし『秋田立志会暴動記』に登場してくる戸巻駒吉の阿が物語るように、自由民権運動の高揚期が過ぎ去つたあとの家庭生活の荒廃は隠けられなかつたであらう。駒吉は十六歳の時、嫁見に行くに金のヨリで髪を結い、田舎にはめずらしい蛇の目金を持っていたほどの旅手好み、進歩的な人間であり、明治十二、三年頃は其の家に毎晩の如く同志が集まつたのであつた。士族、農家、職人と色とりどりの階級だが、やがては地主か武士にならうという青雲の夢を抱く面々であるから、まさに天を呑むという意気だつた。羽織や袴をつける者、陣羽織を着るものまであつて、時には土百姓、町人であつても取差一本打

ち込んで天下の志士気取りであつたが、人目をはばかる密会であるから、夕闇時に集り、徹夜で談じ、明けがた近くになつて解散した。その都度酒食の饗応があつたので、戸巻の家はために産を傾けたのであつた。もちろん、角鹿忠四郎の場合、このようなナンセンス劇であつたとは思われないが、相当に類似した点もあつたことであらう。それは五戸町を中心にした何の士族復讐運動を多ればわかることである。

九

角鹿忠四郎の没年は明治二十五年二月五日であるから、丁丑三十五歳の壮年である。病因は熱病といわれ、國太郎の養母、柴崎てゐるの語として伝えられているところでは、没地は盛岡といわれている。現在、位牌は、野辺地町海中寺（浄土真宗）にあり、同寺の話でも、戒名「歸雲院義山俠丈居士から推して、やはり他寺から転葬されたものがらうといっている。生前の功績に対して、三戸か五戸かに石碑があると國太郎もいつていたそうであるが、その真否も不明である。

忠四郎の遺族は、現在、青森市矢作に住んでいるが、忠四郎についての話は、國太郎が息子、健一に妻に語つた思ひ出話と、マルゴのバア様と云われる國太郎の妻の姉（工藤行幹の妹の娘、明治二十三年生まれ）の思ひ出話があ

るだけである。

柴崎家の過去に依ると、忠四郎の母は青森市野内の医師、千葉良雲（当時野辺地住）の長女昆和である。忠四郎四才の秋、安政七庚申年十月、徳四郎は新町掛屋稼を譲つてもらつて、④家を創立した。掛屋はもちろん、幕府や諸藩の公金出納を担当した町人のことであつて、野辺地の有力商人であつた。⑤柴崎家も、南部藩掛屋御用をつとめていたのだらう。この掛屋稼を分家の⑥に譲つたというのはノレン分けのことか、業務移管のことであるか、または縁というのは株の誤記か、不明であるが、とも角、忠四郎父徳四郎も相当な人物だつたであらう。

忠四郎の兄警作は安政二年、母親昆和十六才の時の子供で、忠四郎は二年後、長女は不明だが二女みきは明治二年、きわが三十才の時の子供である。徳四郎の生没は不明であるが妻が天保十年（一八三九）生まれだから、余り年令が置かない天保生まれだらうと思ふ。徳四郎とその兄宇太吉、つまり四代目権三郎とも年令は余り置わなかつただらう。なぜなら、四代目の二男、金太郎（稻本育一）と忠四郎とは一つ違いで、しかも四年間同じ屋根の下で生活したということは、父親同志がそんなに年が置わなく、家長が健在であつたことを意味する。また、育一、忠四郎が非常に仲良かったといふことは、こゝい

う生活に基くものであつて、特別なものであつた。それはまた、この従兄弟同志の仲だけでなく、五代目権三郎、つまり育一の兄、小太郎との血もそうであつたと考へるによく、この叔父が結局、忠四郎の養父、国太郎を引取るわけである。彼は明治二十八年に死んだが大酒のたけに胃潰瘍をおこし、血を吐きながら、なお飲み、息を引きとるまで、その血なまぐさい胸に国太郎を抱いて寝たので、なまぐささに降参したと国太郎はよく話していたといふ。

忠四郎は野辺地の人間であるが、戸籍上の本籍地は五戸町五十三番地（戸）にある。長男彦六は明治十三年三月廿七日生、二男国太郎は明治十七年一月十七日生、三男賢三は明治二十年五月六日生まれである。ところが、妻きよとは明治二十二年五月十八日に離婚している。その原因については、忠四郎が野辺地——五戸——東京と余りに国事にばかり没頭して家に居つかなかつたため、妻が不満を持ち忠四郎と縁を切つたとか、きよが小柄で非常に綺麗であつたが、反面、豪商の娘なので、我儘で贅沢であつたため家内がおさまらなかつたといふ話が残っている。この点、今日ではどちらが非なりと簡単にきめつけることはできない。同じことは中市稻太郎の妻きよについてもいえることで、いふならは新時代誕生のため、犠牲といえよう。

忠四郎妻きゑが、その後歩んだ直は、まさに波瀾万丈の人生であつた。晩年、盲目となつたがバシヨのババチへの愛称で、子や孫に囲まれて八十余才の長寿を全うしたといふことを、五百沢兵江、きゑの二女今井キヨウ氏が教示してくれた。

今井氏の手紙によると「きゑは目が全く不自由になつても感性がすぐれ、退屈しのぎに日本紙裏打ちなどして、布で煙草入れ、きせる入れ等を針でもつて縫製し、近所の耳寄りに誰彼となく惜しげもなくくればはれ、自身も満足していました。またその作品を見た人は盲人が作つたことを聞いて驚かぬ人はなかつたことは事実でありました。歌舞伎、義太夫が好きで、その物語の中から縁に話をしてくれました。大家に育つたからでしょうか、おおかたで座場な振舞ひが多分にあり、姿勢も正しい人でした。然し、息子らの訪れが時に少くなると呼びつけて、たしなめるような一面もありました。」とその人柄の一面を伝え、その他一族、縁者にまつわる立ち入つた話も書いてよこしました。手紙は親子の情愛に満ちた、読む人をして感動せしめずにはおかぬ内容であり、きゑの前半生の波瀾とはうけて代つた後半生の平安さに、私自身すら救われな感を覚えた。

忠四郎ときゑの間の長男、彦六については「彦六は郵便配達をし、夜間塾学に励み、樺太に行ったこともある

由、無理がたたり身体をこわして歌葉に帰リ、五百沢で病死した」と書いている。彦六は最後まで殉難性だったが、母の生家からの積極的援助はなく、国太郎の苦難の歩みと同じく、むしろ年上であつたからそれ以上に自立を強いられるが、またはその気持が強かつたのではなかつたか。三男賢三については「通信関係の勉強に励んだが五百沢家で病死」とあり、薄幸な若者に一瞬の涙を禁じえない。

所で、明治三十六年六月二十八日、救えの廿歳になつた国太郎は、三十二年、彦六死亡後、絶家になつていた再建家の再興を、五戸村役場の江渡種助（自由党県議）村長に届けており、しかも二か月後の八月二十日、今度は鹿家屈を提出している。この慌ただしい動きは一体何を物語っているのだろうか。この時、国太郎の後見人になつたのは、三代目柴崎権三郎の妻タマの姉、きよの丈である山口ス太郎（俳人山口鷺子）であつた。

十

明治三十六年の唐突な再建劇が、一体どんな理由によるものであるか不明である。しかし忠四郎の遺児に対する一連の取り扱いに、何かしら冷たいものを感ずるのは、結局忠四郎にたいして柴崎を除いた一族の人々が、余り好意を抱いて居かつた証拠だと思ふ。陰の話では、国太

山口家鹿家に相当の遺産があるものと思つていたところ、
遺産一つで追い出されたとかで、驚子を快く思つていなか
つたのである。山口家は当時、北海道への玄関口であ
る野辺地で繁昌した料亭であつた。驚子の妻の生家、霞家
も福屋に上つた。さよ、タマの祖父は五戸の大直、高橋直
吉からきいていた。大直家は中馬純政め所と称して、旧
藩時代、大いに巾をきかした本陣宿であつた。明治二十
八年二月五日の東奥日報の記事に、エンブリの融れ頭、
高橋直太郎が当地方の若者頭へ手紙を送つてその復活、
振興、保存を囑へたことが載つてゐる。伝統芸能のパト
ロンの立場にあつたのだらう。

一方、野辺地の豪商間には上方文化の影響が濃く、決
して清蔵氏の「野辺地繁盛記」(玄報のへじ、卯号)の一
節によると「商売上の交流や京阪方面の流行、嗜好、文
化なども伝えられて、歌、俳諧、謡、歌舞伎、義太夫、
お茶りの祇園はやしや毎朝のお茶がゆなども当時の名残
としてある。俳句や謡なども、五戸あたりとも交流があり、
鼓や太鼓を入れた謡や、はやしの会を開いた記録をしば
しば見受け、昔の風流も偲ばれる。」とあり、冬豪商が
それ／＼雅号をもつてゐることも紹介されている。

われ／＼は、再鹿忠四郎を考へる場合、単に明治の客
家の側面ばかりでなく、江戸商人的面も考へなければな
らない。五百沢ぎ原について娘ちようが語つてゐること

はまさに江戸商人的教養にほかなりない。

五戸の旧家、江戸家の総本家、江海又兵衛家付後継ぎ
がなく絶家となつたので、分家の江渡庄兵衛は本家を守
るために自分の家をつぶして江又家を建てることした。
有名な哲学者、江渡秋嶺は江庄の息子で江又家を継ぐの
である。この江渡庄兵衛は七戸の素封家、成田昆平治家
からの養子であり、その元が美濃屋両鹿家へ養子に入り、
忠四郎妻ききの姪のねの夫となつてゐる。つまり忠四郎
は義理の叔父にあたるわけである。従つて忠四郎が五戸
へ来てもそれなりに縁戚関係があり、また秋嶺などに影
響もあつたと思われるのである。

国太郎の後見人だつた山口驚子は、子規門下で虚子と
双壁といわれた河東碧梧桐と交遊が深いが、山口家も野
辺地の衰退とともに没落してしまい、文献資料も散逸し
てしまつてゐる。彼は慶応三年の生まれであるから忠四
郎のことは熟知してゐるはずである。驚子の俳風がどん
どんものであるが不明だが、単なる江戸文学の系譜上の俳
人では厚いと思う。というのは碧梧桐は持人生・接自然
の新風を句早にもたらした人物であり、また同年代、隣
村の浦野館村に社会の矛盾を強く叫んだ大塚甲山が中央、
地方で活躍し、八戸でも青年会の北村益が新知識人とし
てリーダーシップをとつて古心と号して俳界にも登場し
てくる。これにたいして野辺地町では驚子が中心になつ

で明治三十二年哲賞賜會が結成されたのである。

ただし、角鹿忠四郎の法名が、靜善院義山佚文居士。というのであれば、恐らくは田舎滑腕な性格ではなかつたろうし、文字通り、佚氣、男だての人物で、道義のたゞ身命を賭しただろう。とすれば町人、文人肌の鷹子とは相性がうまくなかつたのではなからうか。取駒事件で中稟官の圧迫には屈しなかつた剛直さは料亭の旦那衆とは相容れないものではなからうか。

假と似た人物で「町誼」に名を残している人物は野坂と三郎である。野坂については次中清蔵氏が、明治三十年頃、小菟明や計画などに妙を得た人と敘示してくださつたが、当時、異色の人物であつたろう。しかし、その讀書内容は、彼が單なる変人、奇人ではないことを物語っている。その一部をあけてみると、馬場辰猪の「糸約改正論」、高橋百侍「内地雜居論」、黒田清隆「南化新論」、高橋五郎「支那論」、「女性真説」、稻垣満次郎「對外策」、中江兆民「警世放言」、何礼之「疏球事情」、その他板垣退助、島尾小弥太、谷干城など、注目すべき著者のものが数多くあり、この図書目録の中に、当時の青年の鋭い意識がうかがわれる。角鹿忠四郎の教養とて同じではなからうか。

豪商、野村治三郎家の支配人、中市康之助の子、謙三は五戸の自由民権家、中市稻太郎の李家筋から分れた家

の子であるが、絶壁と称し、野辺地界の指導者であり、郷土史家であり、町きつての文化人であつた。明治の末に慶應義塾の理財科を出て、社会の動きに鋭い目をむけていた一人だつた。社会党代議士渋谷徳蔵は中市謙三から大正の始めに社会主義の概念を手ほどかれたのだという。(横浜正大氏談)しかし中市は逸民にひとしい生活をおくつた。所詮、ケゼルシヤフトにむかぬ己れの姿を、野村治三郎代議士の末路に見たのがも知れない。中市稻太郎のことも話していたというが、これまた一篇の哀話として語っていたことだろう。

かの有名な博覧会王、櫛引弓人も立五二、野村新八郎家出身の母をもつ、野村に血をうけた奇傑であつた。野村銀行と櫛引弓人の紛争に中市支配人が一役買つていたことは周知の事実である。こうしたことから中市謙三は識的に逸民、遊民の生涯を送つたのではなからうか。

そうしてここに私は新時代の苦悩を背負つて生きた三様の生き方を知る。その一つは、祖父、中市稻太郎の米光に憧れ、青雲の志を抱いて上京し、焦慮の末、中途に挫折した中市正亮の例であり、才二は巨富を誇つた立五一家の崩壊を目の前にみて、時代の流れから後ずさりして風流に身を任せた中市謙三の生き方であり、才三は角鹿忠四郎の遺児たちが送った生き方である。

七戸の自由民権家、山田政一も、中市稻太郎の子供ら

も、落魄しては野村とか西村とか菊万とかの縁戚、豪商、世話をつけ、客分として生活していた。しかし、角鹿忠四郎の子どもたちだけは、天は自ら助くるものを助くという気概からか、はたまた義山、俠丈、居士の父の血を引いているためか、他を頼らず、剛毅に自力で生き抜いて行つた。歌棄で若い生命を散らせた彦六、貞三にしても、養父は松前藩の御用商人として富を誇り、実母は氣丈夫で何百人というベン衆を指揮した人物である。樺木下りをし、苦学に体を損ねるような生活はしなればすんだものだったともいえる。しかし彼らは養家に甘えず進んで旅の直を歩み中途にして倒れた。国太郎の生き方も忠四郎の面影を彷彿させる。十三才から徒弟奉公をして主家によく尽し、独立してからも人には良く尽し、官憲の正道にも屈しなかつたという。

このことは、一面平民出身の先覚者、並びにその系累の辿る道がいかに苦しいものであるかをよく物語っている。それだけに角鹿忠四郎はすぐれていただろうし、反面危険人物視もされただろう。明治の野辺地は表面上、豪商に支配された穏やかさがあつたが、その中にも彼らの支配のおびやかす人間も存在していた。同じ角鹿家でも一家を捨てて流浪の旅をし、神戸で窮死した人物もあり、ひばり牧場をめぐる騒動、中派昆一郎の存在など陰湿な問題があり、こうしたことも忠四郎の死没地が不明

になる一つの背景であつたろう。

むすび

私は角鹿忠四郎の短い一生は、近代への脱皮に遅れをとつた野辺地町の運命を象徴しているように思う。

鮎葉港に政財界の総力をあげ、自由民権運動には士族の知識、豪農の財力を総合的に傾注して相補短しあつた入戸地区と、前期資本の寡頭支配の上に守住了る野辺地の差が、町勢発展の推移の中にもみられ、近代へのエネルギーは町を素通りして青森や海峡の彼方の壱館へ吸い上げられてしまつた。俳句などの文化のきらめきは、燐火の消える前の一しきりのぬくもりであつた。

再鹿忠四郎らが身命をなげうって主義のため挺身した明治十三、四年頃の青森県は「民情危懼、獎勵に及びず、更に南明の何物たるかを稱せず、郊原荒蕪たるは全国に冠たりし」僻土にして、雑穀を以て生活するもの、人民十の八に居る。飲食衣服の疏なるは比するに地なし。多くは麻布を着し、村落人民は牛馬と共に傳息するに似たりし（朝野、明治、8、12）と評せられている。郡部日用の文字を解でざるもの過半という時代に、自由民権家たちはどのようにして運動を進めていったであろうか。また彼らを羽の父老たちはどのように迎え入れたであろうか。

明治十三年八月十二日の「東京日マレ」に山梨県の模様が報じられており、時の政府に向かうこと自体を思とする宿老たちは、藩時代の一掃失敗の例をあげ、「当国は他国と違ひて不平士族と云ふもの無きに、余計なる人の尻押して騒ぎ廻るは到底わが甲州の恥辱なり、右様の至みは早々思ひ切り、分相応に密相、葡萄の肥養に氣を付けて、蚕糸等の業を励まば、政府の思召しにも叶ひ、子々孫々永続して、家畜み繁盛すること疑ひなし、ゆめ／＼了すべからず」と若者たちを説諭したという。新聞では波りを文政、天保の古物と酷評しているが、青森県の受けとめ方も似たもので、新知識を学び、青雲の志に燃える若者はとも角、農山漁林の家長たちの嘆息もそんなところにあつたろう。

青森県の自由民権派は、明治十四年一月、河野玄中らの東北有志会に入り、後に東北自由党のメンバーとなつた。主たる任務は北海道の遊説である。東北自由党の規約では、青森県から十名の総代人を出すことになつてゐるが、そのメンバーは不明である。恐らくは義塾派が主であるが、南部側からもバランスの都合上、二、三名が任ぜられているはずである。角鹿忠四郎がこの中でどんな地位を占めたかは今後の資料探求によるが、新知識の彼が活躍したであろうことは充分推察できる。

長谷川竹南が県南の政治家を採訪して得た結論では、

県南地区の政党奔達の原因は三つあって、第一は盛岡自由民権派の領導、第二は取駒事件、第三は千五百五十銀行事件であつた。また上北郡は陸奥改進黨の所屬で、鎌田政通と事を共にし、山田改一、上崎光一郎、角鹿良右エ門、江渡廣兵衛らが地方を代表して同党に所屬してゐた。かかる状況では自由党左派に属したのであるが角鹿忠四郎が、その志を伸ばす余地はなかつたであらう。さりとて取駒事件の農民を秩父的に組織化することも不可能で、雄略空しく、徒らに『義』、『侠』の名を留めるだけに終らざるを得なかつたであらう。

あとがき

小論ではあるが、まとめるにあたり色々方々から御助力をいただきました。本文中に明記した方々のほかに、研究の当初から御病氣中にもかかわらず、野辺地に不案内な私にその人脈についてあれこれ御教導をたまわつた角鹿哲次氏、戸籍関係の福田武雄氏、角鹿家について色々話していただいた角鹿伸、大釜さよ、鷹山ふじの、角鹿爾文の諸氏、霞寮に関連した霧良彦、山口良太郎先生、それに西村豊寿、平野義太郎両先生、私の販場の馬場重治、吉米地孝雄両先生、その他明記し忘れたが、数多くの方々御協力に厚くお礼を申し上げます。

(六七、四、二十三)

(追補)

角鹿忠四郎の芋向について、一つの推論として大井憲太郎の内で芋を芋んだのではないかといつたが、この夏休みに、野辺地町、角鹿扇之屋に伝わる、角鹿「要」留綴、乙オ一号(明治七年より十六年までの十年分、乙号とは類、同届米私用貸借上諸文の下書留であり、甲号は公的のもの、丙号は酒屋関係書類である。)を拝見する機会を得て益々その考を強めた。

すなわち、同留書に、角鹿忠四郎は角鹿吉兵衛の弟として出てくるが、最初に登場してくるのは、明治十一年四月七日の角鹿吉兵衛より野辺地警察署宛の代人頼に書いてある。

この事件は、角鹿吉兵衛が同町の熊谷徳松へ貸しつけをしたが、いかなる事情か、徳松長男久松を相手に貸金催促のトラブルが明治九年、十年と続き、すでに青森裁判所で争われている問題であった。

忠四郎について、吉兵衛は「私弟」といい「私の家事取仕居候者」としている。つまり明治十一年には、柴崎忠四郎はすでに角鹿き急と結婚し、角鹿の主要人物となつてゐるわけである。吉兵衛は明治七年に父の死去により襲名したばかりである。また、当時、角鹿吉兵衛と柴崎権三郎とも相当親密であつたようで、金銭関係の保証

人もよく引き受けている。

ともあれ、角鹿忠四郎が歴史文獻に現われてくる才一頁が裁判問題においてであり、彼自身が「臣民」代人の弁でも、相手が「請求の権利を拒く」といふ表現を使つており、単なる商人の文章でないことを示しているのは、忠四郎が新時代の知識人の才能をもつてゐることを示しているのである。

忠四郎が登場してくるオ2番目は、明治十五年二月十六日の記事の酒屋約定規則においてである。彼はここでは、橋本伊三郎とともに酒屋連約取立人となつており、この時の酒屋は野村治三郎ら、既述の入野の豪商たちである。忠四郎は、明治十五年の段階——自由民権運動の昂揚期——においてまだ野辺地の豪商たちとつながつてゐるのであり、しかもそれは、彼らより一段低い使役人的立場にあつたのである。地方の大抵の自由民権論者が書記的地位にあつたが、忠四郎の場合は前朝商人の代弁的地位にあつたといふよう。

しかし、忠四郎の果たした役割を過小評価はできない。守ぜむら、「要留綴」の中に、明治十六年八月十四日付の「自由新聞」の雑誌欄の技藝が載つてゐるのである。その内容は政論的なものではなく、農林水産関係の書籍出版の案内で、書名は、農成全書、成杉図説、欧米豪商立志編、商業汎論、工業製造、鉄道建築編、大日本樹丹

説、大日本水産誌、養魚新報である。

このことについて私は二つの点を指摘したい、オーは、明治十六年の時点において、野辺地の豪商が自由党の機関誌を讀んで、そのメモをわざ／＼作成しているという問題意識である。

オーはこのメモの内容に示される問題意識の内容の特質である、つまり地方の豪商にとって問題なのは、政論よりも殖産興業面での効用なのである。ここで言えることは、自由民権論、運動は地方にとっては抽象的哲理念として受容されたのではなく、新技術導入という実利上の必要からなのであるということである。

この際、角鹿忠四郎は新知識導入のパイプ役になっていたと思う。そして、パイプ役、書記役という傍き役から主役に上るうとし、独立性、リーダーシップを発揮した時に、忠四郎の存在が抹殺されただろうと思う。またこの過程において、忠四郎自身、焦りから大きな失敗、運動の挫折を犯したのではなかろうか。その証拠が明治十六年七月の角鹿吉兵衛が野村治三郎、角鹿良右エ門に宛てた忠四郎に係わる保証人としての義務、責任完了の念書である。

この時の借金は五戸の金沢三郎や角鹿良右エ門から前年の明治十五年七月二十八日、六百円を借用したので、野村新八郎、角鹿吉兵衛が保証人となっている。しかも

その後も借用が続いたらしく、合計が相当の額になっており、借り主も忠四郎一人ではなく、三人組であった。従つて吉兵衛は弟忠四郎に関係する責任分だけは支払うということの念書を出しているのである。

この六百円という、当時にしては相当な額の借金は同のために必要であつたが、また何に使用したかは一切不明である。私的存続興費か、産馬組合事件の訴訟費か、自由民権運動救済にかられたのか、一切は今後の調査をまねければならぬ。明治十六年は、近江八戸の主家の親ともいへば蒲山太吉が、大暴風雨のため、舟をかけた協商会の持ち舟を失つて破産に直面した年であり、一方、日本鉄道を中心に企業熱も高まつており、業外でのような面に手を出した失敗であつたかも知れない。

この後、明治二十二年に角鹿き急と離婚し、明治二十五年、死没地である江かでない窮死をとげるのであるが、波瀾万丈を極める末路は一体何を物語っているのであるのか。